

月刊

地域保健

10
2010



●特集

開業保健師大研究

●FACE 2010
野口久美子さん

水巻町健康課課長

●OPINION！保健師さんへ
特定非営利活動法人生きるちからV-VACE代表
甲斐裕美さん



「問題が起ころる前からかかわらなければ保健師とは言えません」

行動力と戦略で「保健師」の存在を印象づけてきた30数年

水巻町健康課課長

野口久美子さん

博多駅前のホテルを出たとたん、顔

を熱風が覆つた。朝の8時半だというのに早くも頭上からは真夏の強烈な日差しが降り注いでいる。前日の福岡市の最高気温は36・7度。今日も炎熱地獄になりそうだ。日差しから逃げるよう

に駅ビルの日陰へと駆け込んだ。

今回の訪問先は水巻町の健康課課長、野口久美子さん。保健師として37年目の大ベテランだ。その大半を同町で過ごし、活躍ぶりは九州でつとに知れわたっている。保健師活動の集大成の時期を迎えたいま、どんなことを語ってくれるのだろうか。期待を胸に小倉行きの鹿児島本線に乗った。水巻駅まで約1時間の道のりである。

福岡県遠賀郡水巻町は北九州市と遠賀川に挟まれた面積約11平方キロメートルの小さな町。人口3万427人、高齢化率は24・5%（平成22年3月末現在）。かつては石炭産業を主としたが、その終えとともに町勢も衰退、

近年は北九州市のベッドタウンとして新たな発展を遂げている。

開放的な役場窓口

車窓の風景が緑豊かな自然に変わった。眼前に水量豊富な遠賀川が現れ、そこを渡ると水巻駅だ。野口さんの所属する健康課は、町庁舎から離れた「いきいきほーる」の1階にある。

建物の内部は開放的な空間が広がっていた。丸みを帯びたカウンターの向



こう側には、お揃いの黄色いTシャツを着た職員の姿が見える。その背中には「いざ 健診」の文字が。取材に訪れた旨を告げると、奥の席から鮮やかなつづじ色のスーツに身を包んだ小柄な女性が現れた。野口さんだ。

「まず、お茶でもどうぞ」。笑顔で東京から来た訪問者をねぎらってくれた。きびきびとした身のこなし。元氣

でサービス精神旺盛。いかにも保健師らしい人という印象だ。「ここは開放的で親しみやすい所ですね」。開口一番、率直な感想を口にした。雰囲気が明るいのだ。

「そうでしょう。住民さんと行政の距離が近いので、ふらつとやつて来てカウンター越しに『健診のデータ、遅いやんか』とか文句を言つて帰っていくような光景が当たり前なんですよ。私は、行政はサービス業だと思っているので、誰もがここを自由に使えるよう



- P16 「新しい公共性」に反映させる保健師の働き方
◎押栗泰代（マイママ・セラピー）
- P26 [Story1] 「0から始まる親子の絆づくり」をめざして
◎押栗泰代（マイママ・セラピー）
- P36 [Story2] 在宅医療との連携を視野に相談活動を
◎神谷栄子
- P42 [Story3] 中小事業場の健康管理を支援
◎齋藤明子（ヘルス＆ライフサポートTAK代表）
- P48 [Story4] うつ病の経験を生かし人の心と命に向き合う
◎徳永京子（マインド・フィットネス協会代表）
- P54 [Story5] ママの笑顔を増やすお手伝いがしたい
◎松山由美子（ままと赤ちゃんの保健室いちばん星）
- P60 [Story6] 市の保健活動の経験を生かし、より質の高いサービスをめざして
◎三井洋子（株式会社 Dream Seed）
- P66 [Story7] 私が独立開業でめざしたもの
◎村田陽子（有限会社 ピーイングサポート・マナ）

[50音順]



papercraft : hiro

開業保健師大研究

保健師の専門性と可能性を探る



専門職としての意識が強い保健師は、行政や企業の中でそのアイデンティティーを模索してきた。ルーティンワークに流されず地域・職域の健康を創出しようとするそのマインドは、「保健師魂」とも表現される。しかし時として組織が持つ制限の前に自らの立ち位置を見失い、疲弊してしまうこともある。行政や企業でなければできないことは多いが、組織内部にいるために力を発揮できないこともある。では保健師の専門性は行政などの組織を離れても成り立つものなのだろうか。

今月号では独立開業して活躍する保健師に焦点をあてる。開業保健師のインタビュー調査にあたった押栗泰代さんの考察とともに、7人の開業保健師のストーリーを通じて、保健師のキャリアアップの可能性を探り、保健師の専門性を一つの側面から浮き彫りにしてみたい。

温かな先輩たちに囲まれ、明るく元気に、すくすくと育っています!

仕事を開拓していく面白さを日々実感して

こそしまりこ 小園茉利子さん

●福島県双葉郡双葉町 健康福祉課



▲ここが私の好きな場所！と案内してくれたのは太平洋を望む防波堤だった

取材・文・写真／西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

福島県の太平洋側一帯を「浜通り」と呼ぶ。その中のひとつ、双葉町役場の健康福祉課に今回のはじょこさんがいる。名前は小園茉利子さん、もちろん初対面なので課の受付から探すのだが、すぐに見つかった。こちらが名乗つた瞬間に満面の笑みを浮かべながら駆け寄つてくれたからだ。元気で明るい人であることはすぐに分かつた。

看護師さんの優しい言葉に憧れて

小園さんは双葉町役場に入つて2年目を迎える25歳。近隣の富岡町で生まれ育ち、子どものころから動物好きな子で有名だったようだ。 「とくに犬が大好きなんですよ。友達の家にいようものなら、もおー、じやれまくりです。でも、家ではアレルギー持ちがいたもので、飼えなくて……。ずっと憧れて、動物にかかる仕事がしたい。ならば獣医さんしかないと

思つていました」

ところが小学校4年のときには、自身が交通事故にあったことで、興味の対象が歴医から看護師に移つていった。「救急車で病院に搬送されました。麻酔を打つときにものすごく痛くて辛くて、周囲の人たちが鬼のように思えた中、優しく声掛けしてくれたのが看護師さんでした。それで興味を持ちました

その後、小園さんの看護師への興味をさらに増幅させる出来事があつた。

「5歳上の姉が高校卒業後に看護学校に入ったのです。そして夏休みとかに家に戻つてきて実習の話をとても楽しそうに話すんです。つらい話なんて全くない。私もどんどんその気になつていきました（笑）」

私は私！ 苦手なものにもあえてチャレンジ



▲テナーサックスの音色にこだわった高校時代

看護学校受験で真っ先に思い浮かんだのは姉が通つていた茨城県の看護学

校への夢は地元福島で名を馳せる福島県立医科大学への進学を念頭に、勉強も頑張つた。しかししながら、成績はあと一歩及ばず。大学に行きたいとの思いは途絶えたものの、高校の恩師から「専門学校から大学に編入することだってできるじゃないか！」と励まされ、看護学校の受験に切り替えた経緯がある。